

「もとはこちら」のお話し

No.63 今月のテーマ

こどもに死なれて



どこにいても何をしても

常に神の掌の上

(平井謙次作 日めくり カレンダーより)

北原ゆり筆

あれから一年が経ちました。
「あれから」のその「あれ」が何を指しているかは、改めて説明するまでもなく、勿論東日本大震災のことです。

大地震、大津波、そしてそれに続く一連の原発事故による大惨事を受けて、あの日から私達の生活全てが大きく変わってしまいました。
命を失った2万人近くの方々の中には、未だに行方不明の方も沢山いらっしゃいます。ご遺族の心痛は察するに余りありますが、日夜、行方不明者の搜索に携わっておられる方々の、そのご苦労にも頭が下がります。

また震災関連で亡くなった方も千人にも上るとも聞きました。中には地震や津波を逃れた後、衰弱死あるいは餓死したのではないかとと思われるご遺体もあったとのこと、一年を経てなお新しく報じられる事実を前に、本当になす術もなく言葉を失います。

方や、なんとか命は取り止めたものの、今なお避難生活を余儀なくされ、遠く古里を離れ、或いは家族がバラバラになったままで暮らさなければならぬ多くの方々があります。

仕事や職場を失った沢山の大人と、親や勉学の場合、そして友達を失った多くの子供がいます。明日が見えないこのような生活の中で、次第に気力も萎えて行き、空しさに胸をふさがれている多くの人がいます。

また、収束の目途もつかない瓦礫の処理や原発の問題など多くの事が、私達の心に重くのしかかっています。そんな中で、こころの整理の付かないままに、とにかく今日一日の事だけを思って、今日という日を必死で生きておられる方が、本当に沢山いらっしゃいます。

いま私達は、震災の真つ只中に

このような大災害を受けた私達は、心も体も傷つき、そして国土も傷ついたままです。誰もが、復興・復活という言葉の口にしなから、感覚としては復興も復活もなお程遠い気が致します。

特に震災で親を亡くした子供や、子供を亡くした親は、その悲しさは時間が経てば何とかなる、という様なものではないと思います。そういう人にとっては、時が止まってしまったという感覚で、あの日から一年が経ったという事に対し、今もその事をどう受け止めていいか分からず、心の整理も付かないままに、苦しみ続けている事と思います。

なぜあの時、自分は家族を救い出せなかったのだろうかと、自分を強く責めてみたり、また自分だけが生き残ったという一種の後ろめたさのような感覚から、立ち上がることが出来ず、うつ状態になっている人も多いと聞きます。

中にはあまりの悲しみから、なくなった家族の事を口にできず、心を閉ざしたままの人もあるようです。

かけがえのない大切な人や大切な想い出の品などを一瞬にして失ってしまったその喪失感の大きさは、体験した人でなければ分からないと思います。

ですから安易な慰めや励ましの言葉は、決して口にしてはならないという気がします。



とどまる事も赦されず

しかしあの日から一年が経ったという事も事実です。

当時を振り返り、あるいはその後の歩みをたどる等の特集番組などが、連日のように流されています。映像を見れば、あの日の記憶がまた新たな衝撃となつてよみがえり、脳裏に焼きつきます。

三月十一日にはなくなった方々へ向けた様々な慰霊や鎮魂の催し等が予定されているのではないかと思います。方や生き残った私達は行き場を失い、せつば詰まった状態の中に閉じ込められたままです。

そういう事で、このもとはこちらのお話しの三月号は、どうしても大震災の事を避けては通れないと思いながら、あまりにも様々な想いが駆け巡り、思いを文章にまとめる事が出来ませんでした。

そこで今回は、もとはこちらの観点に立ち、なくなった多くの方と生き残った私達という観点から、平井先生の、「子供に死なれて」という文章をご紹介させて頂きたいと思います。

現実にはどのような悲惨な体験をし、辛い思いをしたとしても、もしも私達が「命」のその本当の姿、実相というものを知ってれば、たとえ今どんな大きな悲しみの中にいたとしても、また違う世界が見えてくるからです。

そしてあの日、あの様にして亡くなっていった愛しい我が子や、我が親、そして兄弟姉妹や友人たちが、その肉体衣を脱いだ後、今、実際にどうしているかという事を知ること、震災によって大きく傷ついた心も少しは癒され、明日に向けて生きる為の大きな力が湧いてくるのではないかと思います。

直感を知っている

死んでしまえば、何もかもなくなり、全ては無になると思っっている唯物論の人にとっては、人生ほどはかないものはないという事になります。

そしてそういう人にとっては、人生は刹那的な快楽のみが目的となり、一時の快楽以外の事には、何の価値も認める事はできなくなります。勿論この先の自分の人生の中に、時間を積み重ねて生きて

いく意味や、人生の深い価値を見出す事は、とても困難になる筈です。

しかし仮にそういう人であっても、自分の親や子供をなくしたその直後は、その亡くなった親や子が完全に無になってしまった心の底からは思う事は出来ない筈です。

そして、その親や子は、今ここにいないと、どこかで強く感じるのではないのでしょうか。

その「今も尚、あの人はここにいない」と感じるその思いこそが、私達の正しい感覚であり直感なのです。

私達は死んで肉体衣を脱いでしまっても、生きていた時と全く変わらぬ個性を持って、この命は脈々と生き続けていくのです。

元々、「命そのもの」は、私達の目には見えなかった筈です。

よくよく考えてみれば、私達が見ていたものは、命が肉体という物質に働いたその結果の姿だけなのです。命には生も死もありません。

私達の大切な人は、死んで肉体衣を脱いだとしても、無になる事などないのです。そして今も私達の傍にいて、私達と共に暮らしているのです。

そういう事は言葉を越えた感覚として、誰もが心の奥深くで感じている筈です。亡くなった人は、物質としての肉体を無くしたただけであり、元々形のない魂や命、そしてその人の個性は、生きていたその時のまま、いまここに存在しているのです。

ですから、その人の事を強く思い、もしくは、「生きていた時に、もっとああしてあげれば良かった」、或いは「もっとこんな事をしてあげれば良かった」等と思うような事があるとすると、その事を思い続け、今度会った時には、その事をして上げようと、心の中で思い、約束する事です。

そういう温かい思いで亡き人を思い続けるその事が、故人へは何よりの最高の供養となるのです。

心は常に通じているのです。そしてまた、思いは必ず実現いたします。

私達の誰もが、過去に自分が思い続けていた事を、今この人生の中でしているのであり、また反対に、自分が今、誰かからして頂いているその事も、過去からの約束事なのです。

そういうことで、今月は平井先生の「こどもに死なれて」をご紹介します。

命というものの実態にふれ、少しでも前向きに生きる為の一つの糧にして頂ければ幸いです。

=====

「こどもに死なれて」

平井謙次

あのね、悲しい時は悲しんだら良い。

そしてね、忘れられないのに、無理に忘れようと努めんでも良い。

何もする気がせんのに、何をするっていうの？

今のままでいいのです。

それが人間の情というもので、子供を亡くした親の自然の姿だと思う。

それでね、自然というのはどんどん変わってゆく。

お釈迦さんも、「この世は無常」と言われた。

それならあの世はどうかという事だけど、

実はあの世も無常なんです。

どんどん変わっていく。

この世とあの世はつながり合っているからね。

こっちが変わるとあっちも変わる。



ところでね、人は何で死ぬと思う？

それはね、死ぬ時期が来たからです。

死ぬ、という事は、誰でも生まれた時からの約束事ですね。
約束事だから、守らん訳には行かんわな。

だからね、人は一人ひとり、

この世でする事をやり終えたら死んで行く。
ちよと学校へ入学して、勉強し終わったら
卒業していくのと一緒にだね。

この物質の世界にある肉体は死んだら滅びる。
だけど、生命そのものは、絶対に滅びないよ。

それで肉体衣を脱いだ状態で、生命そのものは生き続けていく。

そして、またいつかその時の魂の状態にふさわしい時と場所、
そして両親を選んで、また生まれてくる。

そしてまたこの世で、肉体という道具、心という道具を使って、
また修行をするんですね。

それを何千回、何万回も繰り返していくのが人間というものです。

だからね、生まれながらにして

もう相当の修行を積んだような清らかな魂の持ち主の子もいます
ね。

あんたの子も、もしかしたらそうだったのかもしれない。

その子ね、姿形はこつちからは見えんだろう。

それでもあんたの傍にいるのちがうか？

そして、あんたがその子の事を思っているように、

その子もあんたの事を思っているはずですよ。

まあ、いずれはあんたも死んで行く。

それでね、親子になる程の深い縁を結んだ者どうしは、

また生まれ変わっても、
色々な関係で一緒に生きる事が多いと思う。

親子、兄弟姉妹、夫婦、恋人・・・、

お互いに色々な役になって、
組み合わせを変えながら、楽しみながら修行していくんだと思う。

あんたら今度は、親子、逆になって生まれてくるかもしれないね。
その可能性、大きいのちがうか？

まあいずれにせよ、今はあんたが自分の役に徹し切る事です。
悲しい時は思いっきり泣いたら良い。

そして嬉しい事、楽しい事があつたら、
遠慮しないで大きな声で笑って喜ぶ事です。

自然のままに、

そのままに生きたら宜しい。



平井謙次の「もとはこちら」
インターネット編

(書籍「もとはこちら」インターネット編(人生相談コーナー)より)

〔ご案内〕

次回四月は、四月十四日(土)を予定しています

勉強会及び月報についてのお問い合わせは、左記まで。

編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com

073・461・6300